

〈新刊紹介〉

(価格は税込定価)

西原哲雄編、工藤和也・依田悠介著『ブックレット形態論概説』

本書は、形態論の研究内容について概説した書である。主に英語の用例を用いつつ、語の成り立ちを研究する形態論では何をどのように分析するのかを解説している。

構成は全6章からなる。「まえがき」「序章」に続く「第1章 語の基本概念」では、語に関する基本的な概念について解説する。「第2章 様々な語形成」では、英語における種々の語形成過程（複合、派生、短縮など）を概観する。「第3章 語の内部構造」では、複合語・派生語の形成における制約や、形態論が統語部門とも密接に関連していることを述べる。「第4章 語の意味分析」では、語の意味分析に必要な概念を紹介した後、語形成に意味が深く関与する複合名詞などの現象を取り上げ、それらに理論的なデバイスを用いて解説していく。「第5章 語形成と分散形態論」では、新しい形態論の理論である分散形態論の概説を行う。「第6章 分散形態論の応用可能性」では、分散形態論の近年の展開を2つ紹介する。本章では日本語の複合語に関する分析も行われている。末尾に「推薦図書」「参考文献」「索引」「編者・著者紹介」を付す。（竹村明日香）

(2025年2月14日発行 開拓社刊 四六判横組み 168頁 定価1,870円 ISBN 978-4-7589-1345-4)

藤井俊博著『和漢混淆文の生成と展開』

本書は、和漢混淆文がどのように生成し展開したかについて、語彙・語法・表記・文章構成などから探り、和漢混淆文の文体を特徴づける要素を探求するものである。具体的には、漢語を和語で直訳して作り出した語である翻読語を指標に、『万葉集』から『平家物語』に至るまでの種々の作品を分析している。更に、動詞語彙や「得（う）」「べし」といった語法、「き」「けり」のテクスト機能といった文章構造の観点から和漢混淆文の特徴を論じている。

本書は全3部15章からなる。「序章」に続き、「第一部 連文による翻読語から見る和漢混淆の諸相」には「第一章 連文による翻読語の文体的価値——「見れど飽かず（飽き足らず）」の成立と展開——」「第二章 『万葉集』における連文の翻読語——「春さりければ」から「春されば」へ——」「第三章 『続日本紀宣命』の複合動詞と翻読語」「第四章 『源氏物語』の翻読語と文体——連文による複合動詞を通して——」「第五章 『源氏物語』における漢文訓読語と翻読語」「第六章 『今昔物語集』における翻読語と文体」「第七章 『打聞集』における漢字表記の生成——連文漢語の利用をめぐって——」「第八章 『平家物語』の翻読語と個性的文体——延慶本と覚一本の比較——」を収める。「第二部 和漢混淆文の語彙・語法」には「第

九章　和漢混淆文の動詞語彙——『今昔物語集』の特徴語——」「第十章　「べし」の否定形式の主観的用法——「否定推量」の発生と定着——」「第十一章　古典語動詞「う（得）」の用法と文体——漢文訓読の用法と和漢混淆文の用法——」を収める。「第三部　和漢混淆文の文章構造」には「第十二章　『覚一本平家物語』の「き」「けり」のテクスト機能——枠づけ表現と係り結び——」「第十三章　『屋代本平家物語』の「き」「けり」のテクスト機能——覚一本との比較——」「第十四章　過去・完了助動詞による枠構造の史的展開——国字本『伊曾保物語』への展開——」「第十五章　『雨月物語』『春雨物語』の過去・完了の助動詞と文章構造」を収める。末尾に「あとがき」と「索引（主要語句、事項・書名、人名）」を付す。（川島拓馬）

（2025年2月20日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 472頁 定価12,100円 ISBN 978-4-7576-1113-9）

伊藤博美著『近・現代日本語謙譲表現の研究』

本書は、近現代日本語の敬語表現において一般に「謙譲語」と呼ばれる一群の語・表現について詳細に考察したものである。まず具体的な謙譲表現を取り上げ、謙譲語を成立させる条件、およびその条件の歴史的変遷を明らかにしている。次いで現代の謙譲表現に対する人々の意識を調査し、今後の謙譲語の動態についての予測、更に過去から現在、今後へとつながる謙譲語の機能の変遷や使用実態等に関する変化の軌跡を描き出している。

本書は全2部14章からなる。「序章　本書の目的と方法」に続き、「I　近・現代における謙譲語の成立と展開」には「第1章　現代の謙譲語の成立条件——「お／ご～する」を例に——」「第2章　近・現代の謙譲語の成立と展開1——先行研究と明治・大正期の使用例から——」「第3章　近・現代の謙譲語の成立と展開2——「お／ご～申す」と「お／ご～する」を中心——」「第4章　近・現代の謙譲語の成立と展開3——「お／ご～する」への移行と「させていただく」——」「第5章　近・現代の謙譲語の成立と展開4——「お／ご～申す」と「お／ご～いたす——」「第6章　近・現代の謙譲語の成立と展開5——形式の消長と受影響性配慮——」「第7章　近・現代の謙譲語の成立と展開6——「差し上げる」「てさしあげる」を中心に——」「第8章　近・現代の謙譲語の対象配慮の諸相——受身形と使役形を中心に——」「第9章　謙譲語形式における参与者間の関係性について」「第10章　近・現代の謙譲語の成立と展開7——「ていただく」を中心に——」を収める。「II　謙譲語使用に関する意識と今後の変化」には「第11章　謙譲語と関連表現にみる「話者認知」という視点」「第12章　謙譲語における話し手の判断の多様性」「第13章　受益表現と敬意をめぐる問題」「第14章　謙譲語に関する自然度判断とその要因」を収める。次いで「終章　今後の研究の方向性と課題」を配し、末尾に「あとがき」と索引を付す。（川島拓馬）

（2025年2月20日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 328頁 定価7,920円 ISBN 978-4-8234-1268-4）

井出里咲子・青山俊之・井濃内歩・狩野裕子・儲叶明著『ディスコース研究のはじめかた——問い合わせ方から論文執筆まで——』

本書は、ことばと社会や文化との関わりに关心を持つ高校生や大学生、大学院生に向けて書かれた、ディスコース研究のガイドブックである。ディスコース研究の内容は、「日常的なことばのやりとり」「ナラティブ・語りの分析」「メディアディスコースの分析」に分けて整理されている。研究内容の紹介に加え、研究につながる問い合わせ方や論文執筆の方法といった、研究に関わる一連のプロセスを解説する試みがなされている。

本書の構成は以下のとおり。「はじめに（井出里咲子）」に続き、「第1章 ディスコース研究をしてみませんか（井出里咲子）」「第2章 問いのタネの探し方、育て方（狩野裕子）」「第3章 方法の探し方と調査のプロセス（井濃内歩）」「第4章 ことばのやりとりを分析する（儲叶明）」「第5章 ナラティブ・語りを分析する（井出里咲子）」「第6章 メディアディスコースを研究する（青山俊之）」「第7章 ゼミ的な場所のイミとその活用（井出里咲子）」。このほかに6つのコラムが置かれ、「卒論を書くという体験」「フィールドワークあれこれ」「同意書の作り方」「卒論ゼミのスケジュール例」といったテーマが扱われている。末尾に索引を付す。（川島拓馬）

（2025年2月20日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 240頁 定価2,970円 ISBN 978-4-8234-1258-5）

平田一郎著『グライス語用論の展開——非自然的な意味の探究——』

本書は、協調の原理で知られるグライスの提唱する非自然的な意味という概念を再評価し、話者の聞き手に期待する心理的反応を語用論的に説明する試みである。語用論は命題的なやりとりを中心に発展してきたが、言語には感情を表現し、心理的な反応を聞き手に与える機能もある。本書では、このような非命題的な言語要素の機能と非命題的な効果が、グライスの非自然的な意味理論から示されることを明らかにしている。

本書は全3部9章からなる。「はじめに」に続き、「第1部 語用論的意味の整理——Griceの視点から——」には「第1章 語用論的意味と語用論的意味を生み出す仕組み」「第2章 Griceの語用論の仕組み——非命題的な言語要素と非命題的な効果（心理的な効果）を組み込んで——」を収める。「第2部 Grice語用論の仕組みの理論的基盤」には「第3章 非自然的な意味」「第4章 CIと心理的な効果」を収める。「第3部 個別現象」には「第5章 質の格率違反と心理的反応の期待」「第6章 不成功的発話」「第7章 単語レベルでの格率の違反と心理的推意」「第8章 呼びかけ語」「第9章 ポライトネス理論と心理的反応の期待」を収める。末尾に「おわりに」と索引を付す。（川島拓馬）

（2025年2月20日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 400頁 定価5,390円 ISBN 978-4-8234-1274-5）

三宅和子・新井保裕編『境界と周縁——社会言語学の新しい地平——』

本書は、現代の言語、コミュニケーションを取り巻く様々な課題に対して「境界」と

「周縁」の視点から迫ることを目的に編まれたものである。人も社会も流動化、複雑化、多様化する世界の中で、新たな問題解決の糸口を考える視点の1つとして、人々や社会が作り出す「境界」の恣意性と曖昧性、そこから生み出される「周縁性」に着目する。併せて、人とことばのリアリティに迫る質的研究の重要性への認識を深め、21世紀の社会把握を可能にする新しい研究観への転換が意図されている。

本書は全3部10章からなる。「まえがき」と「序章 「境界」と「周縁」から読み解く社会とことば（三宅和子）」に続き、「第I部 「境界」の引き方」には「第1章 娯楽と社会運動の境界——「LGBT ブーム」と言語的レガシー——（クレア・マリイ）」「第2章 バルカン・バベル——言語の境界と翻訳——（坪井睦子）」「第3章 多言語地域における言語シフトと危機言語を考える——フィリピンの事例から——（木本幸憲）」「第4章 幼少期に中国と日本を往還した若者のアイデンティティ交渉——共通の傾向と年齢に応じた変化——（藤越）」を収める。「第II部 周縁性がもたらすもの」には「第5章 方言景観と方言みやげの社会史（井上史雄）」「第6章 メディアが再生産する方言イメージ——ドラマと翻訳に描かれる東北方言——（熊谷滋子）」「第7章 播州ことばを起点に世界の周縁言語話者と考える言語多様性継承——それでも話し続けることの言語社会学的対照——（寺尾智史）」「第8章 琉球諸語の再生のために——世代を超えて繋がる力——（新垣友子）」を収める。「第III部 「研究」の捉え直しと越境」には「第9章 「トランス」の向こう側に——「言語化された世界」の内実——（尾辻恵美）」「第10章 研究・教育の越境をめざした本書の学び方（新井保裕）」を収める。各章の後には、それぞれの著者によるコラム「私の研究遍歴」を収録し、各自の経験のプロセスが研究に結びついているさまを示している。末尾に「あとがき」を付す。（川島拓馬）

（2025年2月28日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 288頁 定価3,740円 ISBN 978-4-8234-1273-8）

川崎めぐみ著『方言オノマトペの形態と意味』

本書は、2012年に東北大学から学位授与された博士論文『東北方言オノマトペの形態と意味』（川越めぐみ著）に、同著者の他の論文を取り入れて、加筆・修正を行ったものである。山形県寒河江市方言のオノマトペを中心に取り上げ、方言オノマトペの形態と意味について論じている。

本書は全3部16章からなる。「はじめに」に続き、「I 方言オノマトペ研究の概要」には、「第1章 オノマトペの定義と方言オノマトペ」「第2章 音象徴と方言オノマトペ」「第3章 オノマトペの形態と意味に関する先行研究」「第4章 東北地方の方言オノマトペの特徴」「第5章 山形県寒河江市方言のオノマトペの概観」を収める。「II 方言オノマトペの形態」には、「第6章 山形県寒河江市方言のオノマトペのオノマトペ辞」「第7章 山形県寒河江市方言オノマトペのオノマトペ辞「ラ」「第8章 愛知県方言ABンABン型オノマトペの付加的要素「ン」「第9章 山形県寒河江市方言オ

ノマトペの派生形」「第10章 東北方言オノマトペのABCB型系・ABCD型系語形」「第11章 山形県寒河江市方言オノマトペの強調法」「第12章 東北地方の民話に見るオノマトペ後接辞の用法」を収める。「Ⅲ 方言オノマトペの意味」には、「第13章 方言オノマトペの意味的特徴」「第14章 東北方言におけるグイラ・ボット系オノマトペの意味と分布」「第15章 東北方言から見た宮沢賢治のオノマトペ」「第16章 多義的オノマトペの意味・用法に関する全国分布調査」を収める。末尾に「付録 山形県寒河江市方言オノマトペ一覧」「参考文献」「おわりに」「索引」を付す。なお本書は、名古屋学院大学総合研究所研究叢書助成を受けて刊行された「ひつじ研究叢書〈言語編〉」の第212巻である。(竹村明日香)

(2025年3月14日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 392頁 定価8,800円 ISBN 978-4-8234-1293-6)

千々岩宏晃著『記憶のことばの使い方——雑談における記憶の心的述語の相互行為分析的研究——』

本書は、2020年に大阪大学に提出された博士論文『日本語の雑談において用いられる記憶の心的述語の相互行為分析』を改稿したものである。記憶という行為と関わりがあると考えられている心的述語（「思い出す」「忘れる」「覚えている」等）が、会話の相互行為の中でどのように用いられているのかを談話分析を通して考察している。結論として、これらの心的述語は会話上の齟齬を修正するために用いられていると述べる。使われ方としては、「進行性の調整」「参与フレームの変更による同定・同調」「抵抗」「不可能を示すこと」の4つがあるとする。

本書は全8章からなる。「凡例1」「凡例2」「第1章 序論 記憶の言葉と行為」「第2章 記憶現象の取り扱いの変遷」「第3章 研究目的と分析対象・方法」「第4章 会話の進行を調整する記憶のことば」「第5章 同じことを示す記憶のことば」「第6章 抵抗する記憶のことば」「第7章 不可能を示す記憶のことば」「第8章 結論 分析と記述からわかる記憶のことばの使い方」。末尾に「参考文献」「初出一覧」「謝辞」「索引」を付す。なお本書は、京都橘大学学術刊行物出版助成制度の助成を受けて刊行された。(竹村明日香)

(2025年3月20日発行 和泉書院刊 A5判横組み 344頁 定価10,450円 ISBN 978-4-7576-1116-0)

小松原哲太著『概説レトリック——表現効果の言語科学——』

本書は、レトリックの理論に基づき、言語を使って生きていくための技術について考察するものである。現代の多彩なジャンルとメディアから豊富な実例を取り上げ、古典的な研究だけでなく最近の修辞学の知見も踏まえたレトリックの一般的概説書となっている。とりわけ、修辞学と言語学の接点に関しては重点的に扱われ、修辞学の諸領域を入口として、修辞的効果を支える言語の基盤を追究する方向で論じられている。

本書の構成は以下のとおり。「はじめに」に続き、「第1章 修辞学の研究プログラム」

「第2章 発想論——コミュニケーションの要素——」「第3章 エトス——信頼のコミュニケーション——」「第4章 パトス——情意のコミュニケーション——」「第5章 ロゴス——理性のコミュニケーション——」「第6章 配列論——コミュニケーションの構造——」「第7章 ジャンルとレトリックの構造」「第8章 文体論——コミュニケーションの表現法——」「第9章 文彩」「第10章 類似性の文彩——統合のレトリック——」「第11章 対照性の文彩——分離のレトリック——」「第12章 近接性の文彩——凝縮のレトリック——」「第13章 同形性の文彩——希釈のレトリック——」「第14章 レトリックの言語科学」。末尾に「修辞技法のリスト」「索引」を付す。(川島拓馬)

(2025年3月25日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 274頁 定価2,750円 ISBN 978-4-8234-1297-4)

福嶋健伸著『中世末期日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系——古代から現代までの変遷を見通す——』

本書は、日本語史上の大きな転換点である中世末期日本語におけるテンス・アスペクト・モダリティ体系について論じたものであり、「～タ」「～テイル」「～テアル」「動詞基本形」「～ウ・～ウズ（ル）」といった形式がどのように異なり、どのように分布しているのかを明らかにしている。さらに、古代語から現代語に至るまでのテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷を巨視的に描き出している。

本書は全3部18章からなる。「まえがき」「序章 本書の目的と意義等」に続き、「第一部 中世末期日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系を記述する」には「第一章 中世末期日本語の～タと～テイル・～テアル」「第二章 中世末期日本語の～テイル・～テアルと動詞基本形」「第三章 中世末期日本語の～ウ・～ウズ（ル）と動詞基本形——～テイルを含めた体系的視点からの考察——」「第四章 中世末期日本語の～テイル・～テアル——進行態を表している場合を中心に——」「第五章 中世末期日本語のウチ（二）節における～テイルと動詞基本形」「第六章 中世末期日本語の～テアルの条件表現——状態表現として解釈できない～テアレバが存在する——」「第七章 中世末期日本語の～タにおける主格名詞の制限について——文末で状態を表している場合を中心に——」「第一部 付章 ～テアルの変遷」を収め、まとめとして「第一部のまとめ 中世末期日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系の記述」を置く。「第二部 中世末期日本語の体系を踏まえて古代日本語から現代日本語への変化を読み解く」には「第八章 従属節において意志・推量形式が減少したのはなぜか——日本語の変遷を「ムード優位言語ではなくなる」という言語類型の変化として捉える——」「第九章 中世前期日本語の「候ふ」と現代日本語の「です・ます」の統語的分布の異なり——文中には丁寧語があるが文末にはない場合——」「第十章 中世前期日本語の「候ふ」と現代日本語の「です・ます」との異なり——「丁寧語不使用」の観点から——」「第十一章 日本語のテンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷——どのようにして古代日本語の体系から現代日本語の体系になったのか——」を収め、まとめとして「第二部のまとめ 古代日本語から現

代日本語への変化」を置く。「第3部 「国語教育」「現代日本語のアスペクト研究」「形式と意味の関係の記述方法」「日本語学史」への関わりを示す」には「第12章 「む」「むず」の違和感を「言語類型の変化」と「テンス・アスペクト・モダリティ体系の変遷」から説明する」「第13章 古典文法書間で「む」「むず」の記載内容はこんなにも違う・その1——「古典文法教育が苦痛であること」の本当の理由——」「第14章 古典文法書間で「む」「むず」の記載内容はこんなにも違う・その2——「む」と「むず」の違いを大学等の入試問題で問うことは妥当か——」「第15章 現代日本語の格体制を変更させている~テイル・その1——「池に鯉が泳いでいる」「冷蔵庫にビールが冷えている」とはいうが「池に鯉が泳いだ」「冷蔵庫にビールが冷えた」とはいわない——」「第16章 現代日本語の格体制を変更させている~テイル・その2——小説のデータを用いた二格句の分析——」「第17章 アスペクト研究における形式と意味の関係の記述方法を問い合わせ直す——~テイルの発達を踏まえて——」「第18章 モダリティの定義に二つの立場があることの背景——「意志・推量」「丁寧さ」「疑問」「禁止」の各形式の分布が文末に偏ってくるという変化に注目して日本語学史と日本語史の接点を探る——」を収め、まとめとして「第3部のまとめ「国語教育」「現代日本語のアスペクト研究」「形式と意味の関係の記述方法」「日本語学史」への関わり」を置く。末尾に「終章」「あとがき」「索引」を付す。(川島拓馬)

(2025年3月31日 三省堂刊 A5判横組み 592頁 定価4,180円 ISBN 978-4-385-36307-3)

肥田栄奈著『「は」と「が」をどう教えるか——中国語話者の誤用を手がかりに——』

本書は、2023年に関西学院大学から学位授与された博士論文『日本語教育における「は」と「が」の指導に関する研究——中国語母語話者日本語学習者の誤用を手掛かりに——』に加筆・修正を行ったものである。日本語学習者にとって習得が困難な「は」と「が」にまつわる問題を文法用語の観点から再検討し、中国人日本語学習者の誤用分析を通して「は」と「が」の文法機能を明らかにすることを目指している。また日本語教育における「は」と「が」の指導手順も提案している。

本書は全6章からなる。「第1章 本書の研究基盤」では、学習者のデータに基づく分析の重要性と、「は=主題」「が=主語」と説明することの問題点を指摘する。「第2章 先行研究と研究方法」では、「は」と「が」の機能を説明するためにこれまで使われてきた「主語」「主題」「主格」「主体」という術語の曖昧性を指摘し、誤用分析を行うことで解決に向けた有効なアプローチができるなどを主張する。「第3章 誤用からみる「は」と「が」の構文的制約」では、誤用分析を通して「形式的構文制約」及び「意味的構文制約」について考察し、さらに従来明らかにされてこなかった「パラグラフ的構文制約」についても考察を加える。「第4章 誤用からみる「は」と「が」の基本的機能」では、誤用データの分析を基に「は」と「が」の基本的機能について明らかにする。「第5章 日本語教育における「は」と「が」の指導法」では、前章までの結果を踏まえて「は」と「が」の指導の方向性を提示する。「第6章 日本語教育において「は」

と「が」をどう教えるか」では、本書の結論と今後の課題について述べる。末尾に「参考文献」「おわりに」「索引」を付す。なお本書は「関西学院大学研究叢書」の助成を受けて刊行された。(竹村明日香)

(2025年3月31日発行 関西学院大学出版会刊 A5判横組み 180頁 定価4,840円 ISBN 978-4-86283-397-6)

国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究 四十四』

日本語の語彙史を研究する国語語彙史研究会の第44巻目の論文集である。今回は、本研究会の幹事であった糸井通浩氏（2024年1月逝去）の追悼号となっている。「糸井通浩先生を悼む（蜂矢真郷）」に続き、平成19年4月以降の著述をまとめた「糸井通浩先生 著述目録（藤井俊博）」を収め、その後に以下18編の論文を掲載する。「地名を中心とする「□生」について（蜂矢真郷）」「平安仮名文における形容詞の語義解釈（中川正美）」「『下学集』言辞門成立論のための覚書（佐藤貴裕）」「「近代語」平等の語史（浅野敏彦）」「日本語におけるテキストの標準設定——本行と振仮名行——（今野真二）」「「加減」の語史と「いいかげん」の成立（鳴海伸一）」「弘治二年本倭玉篇の和訓の典拠——経典积文の影響——（高橋忠彦・高橋久子）」「貝原益軒『大和本草』における筑前の俚言に関する検討——小野蘭山『本草綱目啓蒙』との対照を通じて——（鬼頭祐太）」「漢語「透視」の展開（奥山光）」「『日本大辞書』が国語辞書史にもたらしたもの——『帝国大辞典』『大日本国語辞典』を例に——（河瀬真弥）」「モンテネグロの意訳表記「黒山国」に関する一考察——大正期における外国地名表記の一例として——（中澤拓哉）」「漢語接尾辞の濁音化条件——中世末期の「者」から——（山田昇平）」「キリストン版ローマ字本「言葉の和らげ」類の語釈側の漢語について——キリストン版辞書類との対照を中心に——（中野遙）」「大黒屋光太夫の日本語（彦坂佳宣）」「『類聚紅毛語訳』の編纂方法の再検討——『波留麻和解』による見出し語の増補——（櫻井豪人）」「「括弧」の語誌（藤本能史）」「上方落語に見られる一人称を動作主とする V+オル・ヨルの使用について（西谷龍二）」「少年漫画におけるオノマトペの2拍語基——語音配列則の経年調査から——（陳萍）」。末尾に「語彙索引」と「人名・書名・事項索引」を付す。(竹村明日香)

(2025年3月31日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 360頁 定価9,900円 ISBN 978-4-7576-1118-4)

工藤真由美著『文と時間——日本語のテンポラリティとタクシス——』

本書は、文の時間表現の諸相について考察したものだが、その際、実際の言語活動において文は場面・文脈というコンテクストの中で機能するという点を重視している。考察にあたっては、複数の表現手段、具体的には複数の文を結びつけたディスコースの形成、複数の事象を統合化した複文の形成に着目している。すなわち、本書ではテンポラリティーやタクシスといった連文や複文レベルの時間表現に焦点が当てられている。加えて、補部として奥田靖雄論が収録されている。

本書の構成は以下のとおり。「まえがき」「序章」に続き、「第Ⅰ部 場面・文脈のなかの文と時間表現」には「第1章 発話としての文のテンポラリティー——はなし合いの場合——」「第2章 ダイクティックな時間指示とモーダルな意味の複合性」「第3章 かたりのテクストにおける時間構造と説明の構造」を収める。「第Ⅱ部 複文と時間表現」には「第4章 徒属複文における相対的テンスとタクシス」「第5章 「などめ」の構文的機能とタクシス」「第6章 時間表現と主体・客体関係——事象名詞節と事象名詞句——」を収める。「終章」を置いた後、「補部」に「第1章 奥田靖雄の動詞論——構文論と形態論の関係——」「第2章 奥田靖雄の文論研究の軌跡——発話論・ pragmatics に向けて——」を収める。末尾に索引を付す。(川島拓馬)

(2025年4月15日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 264頁 定価5,500円 ISBN 978-4-8234-1265-3)

小林芳規著『小林芳規著作集 第七巻 訓点・訓読・音義』

本著作集全8巻のうちの第7巻に相当するもので、「訓点・訓読・音義」の諸論考を収めたものである。配列としては、最初に漢訳仏典の受容と白氏文集の受容について訓点資料よりみた論説を掲げ、次に個々の訓点資料の訓点について報告した諸論考を收める。最後に、一切経音義と新訳華厳経音義私記の解題、新出の一字頂輪王儀軌音義の紹介を含む論考を載録する。

本書の構成は以下の通り(旧字体は新字体に改めた)。「凡例」に続き、「漢訳仏典の日本的受容」「訓点資料より観た白詩受容」「国語学国文学研究室蔵 八字文殊儀軌古点」「新撰朗詠集承久二年書写加点本の訓の系統について」「正宗敦夫文庫本長恨歌伝正安二年書写本の訓点について」「本朝文粹卷第六延慶元年書写本(乾)」「本朝文粹卷第六延慶元年書写本(坤)」「醍醐寺蔵本朝文粹卷第六延慶元年書写本の訓点について」「防府天満宮蔵妙法蓮華經八巻の訓点」「仁和寺蔵後鳥羽天皇御作無常講式の訓点」「六地蔵寺蔵『江都督納言願文集』の訓点について」「宮内庁書陵部蔵 広島大学蔵 天理図書館蔵 一切経音義解題」「小川広巳氏蔵 新訳華厳経音義私記 解題」「高山寺蔵本一字頂輪王儀軌音義について」「金剛頂經一字頂輪王儀軌音義(三本)」。(竹村明日香)

(2025年4月18日発行 汲古書院刊 A5判縦組み 424頁 定価13,200円 ISBN 978-4-7629-3666-1)

窟園晴夫著『一般言語学から見た日本語の音韻構造』

本書は3部作からなる「一般言語学から見た日本語の音声」シリーズの第3巻目である。モーラ、音節、音楽と言葉の対応関係(text-setting)、プロミネンスの衝突などを取り上げる他、甑島方言や鹿児島方言など諸方言にも目を向けて日本語の音韻構造を明らかにしている。

本書は全5章からなる。「まえがき」に続く「序 本書の概要」では、用語の解説を行う。「第1章 一般化と有標性」では、言語研究において重要な概念である一般化と

有標性について説明する。「第2章 モーラと音節」では、日本語の様々な現象（俳句・川柳の韻律、連濁、複合語の短縮規則、言い間違い、音楽のテキストセッティング、乳幼児の言語獲得など）を分析し、モーラや音節、フットという概念がどのような役割を果たしているのかを考察する。「第3章 モーラと音節に関する史的考察」では、九州西南部の二型アクセント地域に観察される3つの対照的なアクセント体系を通時的視点から分析し、モーラ体系から音節体系への変化プロセスと、その背後にある原理を考察する。「第4章 歌謡と音韻構造」では、音楽（楽譜）と歌詞の対応関係に注目して、英語や日本語の歌を分析する。野球の声援についても考察を加える。「第5章 プロミネンスの衝突」では、英語で強勢アクセントの連続が有標として避けられるのと同様に、日本語でもアクセントやイントネーションにおける高音調の連続が避けられる傾向にあることを指摘する。末尾に「結び」「英文要旨（English summary）」「参照文献」「索引」を付す。（竹村明日香）

（2025年4月30日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 348頁 定価5,280円 ISBN 978-4-8011-1010-6）

包雅梅著『現代日本語の数量を表す形容詞の研究』

形容詞「多い／少ない」は、名詞を修飾する裝定の位置に現れにくいことが知られている。本書は数量を表す形容詞「多い／少ない」に見られる使用制限について、形容詞の段階性に着目することで、類義語との違いも含めて「多い／少ない」の特質を正確に記述し、数量を表すという概念に関して統一的な説明を試みている。

本書の構成は以下のとおり。「まえがき」に続き、「第1章 なぜ数量を表す形容詞を研究するのか」「第2章 先行研究の検討と本研究の位置付け」「第3章 「多い／少ない」とその類義語類」「第4章 「多い／少ない」と他の段階形容詞」「第5章 「多い／少ない」の使用条件」「第6章 結論」。末尾に「あとがき」と索引を付す。（川島拓馬）

（2025年5月1日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 180頁 定価7,040円 ISBN 978-4-8234-1298-1）

山岡政紀・西田光一・李奇楠編『世界の配慮表現』

本書は、世界の諸言語における配慮表現を比較対照しながら配慮表現という言語表現の実像について議論考察する目的で編まれたものである。配慮表現には個人レベルでの配慮の表し方から社会や文化圏といった集団レベルで慣習化されたことばのバリエーションまであり、本書ではそれらの諸相について論じられている。本書では日本語、英語、中国語、韓国語、タイ語、アラビア語における配慮表現を詳細に記述するとともに、それらの対照研究も試みられている。

本書の構成は以下のとおり。「まえがき」に続き、「第1章 配慮表現の普遍性と個別性（山岡政紀・西田光一・李奇楠）」「第2章 日本語の配慮表現（小野正樹・山岡政紀）」「第3章 英語の配慮表現（西田光一）」「第4章 中国語の配慮表現（李奇楠）」「第5章 韓

国語の配慮表現（金玉任）」「第6章 タイ語の配慮表現（スワンナクート・パッチャラーパン）」「第7章 アラビア語の配慮表現（リナ・アリ）」「第8章 配慮表現に関わるテンスの日英対照（牧原功・西田光一）」「第9章マイナス評価の配慮表現に関する日中対照（李奇楠・山岡政紀）」「第10章 副詞による賛同表現の日英対照（甲田直美・西田光一・山岡政紀）」。末尾に「あとがき」と索引を付す。（川島拓馬）

（2025年5月3日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 232頁 定価3,960円 ISBN 978-4-8234-1295-0）

金水敏著『大阪ことばの謎』

本書は、大阪弁（そして広く関西弁）の言語的特徴や成立史、関西弁キャラの今昔、大阪人のコミュニケーションスタイルなどについて解説した書である。現在一般にイメージされやすい「大阪弁（関西弁）」の諸特徴が、いつ頃、なぜ、どのように成立したのかという問い合わせている。

本書は全7章からなる。「はじめに」に続く「第一章 大阪人のしゃべりはなぜ軽快か—大阪弁のリズム—」では、オノマトペを例にして大阪弁・関西弁のリズムの特徴について述べる。「第二章 歌う大阪弁—アクセントが作ることばのメロディ—」では、大阪弁の決まり文句が音楽性を帯びる理由を関西アクセントの性質と関連付けて説明する。「第三章 大阪弁・関西弁はひとつじゃない—「ほんもの」の大坂弁とは?—」では、「関西弁」と呼ばれる方言が一様ではないことを示す。「第四章 大阪弁はいつ、どのように生まれたのか—「コテコテ大阪弁」の誕生とその後—」では、大阪弁の歴史を追究し、古いタイプの大坂弁（「コテコテ大阪弁」）が確立するまでの道筋を描き出す。「第五章 大阪人は本当にけちか—ステレオタイプの成立と変容—」では、大阪弁・関西弁キャラクターが守銭奴・食いしん坊等のマイナスイメージを伴う異人的キャラクターから、社交的で明るく活発なキャラクターに近年変容していることを指摘する。「第六章 大阪人のコミュニケーションはどこがちがうのか—大阪人はストリートファイター—」では、大阪人が「正しさ」だけでなく「楽しさ」も会話に求め、「ボケ」と「ツッコミ」を日常で頻用する傾向を示す。「第七章 日本語話者はなぜ大阪弁に魅せられるのか—ポストモダン化する日本語話者—」では、正しさと共に楽しさも重視する関西弁話者のポストモダン的コミュニケーションが、全国の若者やネットユーザーに受容されている様について考察する。書中では随所にコラムも掲載する。末尾に「おわりに」「参考文献」「資料出典」を付す。（竹村明日香）

（2025年5月5日発行 SBクリエイティブ刊 新書判縦組み 256頁 定価1,045円 ISBN 978-4-8156-2471-2）

H. A. スィロミヤートニコフ著、鈴木泰・松本泰丈・松浦茂樹訳『近代日本語の時制体系』

本書は、1971年にモスクワで刊行された、ニコライ・アレクサンドロヴィッチ・スイ

ロミヤートニコフ著の *Система времен в новояпонском языке* の翻訳である。原著では、16世紀以降の近代日本語における時制体系が前代の体系からどのように変化して現在のような姿になったのかについて追究されている。原著での議論は、明治以降の外国における日本語研究にも広げられ、同時に日本の伝統的な文法を受け継ぐ明治以降の文法家による時制論も位置づけている。その作業を通じて、日本語の時制においては出来事間の時間関係によって時制が決定されるという相対的時制論が展開される。

本書の構成は以下のとおり。「訳者前書き」「凡例」「序章」に続き、「第1章 存在の形式としての時間と時制の文法的カテゴリー」「第2章 文法的な時制の相対的な意味」「第3章 なかどめ活用の時制形式」「第4章 文法書におけるいいおわりの時制形式の問題」「第5章 つなぎ要素とおわりの前の時制形式」「第6章 規定語のポジションでの時制形式」「第7章 主文の述語の時制形式」「第8章 時制形式の意味におけるペーフェクトと継続のニュアンス、および大過去」。次いで「結論」を配し、末尾に「使用文献リスト」「資料の略称リスト」「ロシア語動詞要覧」「索引（文法用語、言語名・言語資料、人名（欧文・和文））」「訳者後書き」を付す。（川島拓馬）

（2025年5月7日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 400頁 定価9,680円 ISBN 978-4-8234-1243-1）

岩崎拓也編『日本語表記の多様性』

2022年1月に、約70年ぶりに公用文の作成基準が改訂された。本書はこれを契機として編まれたものであり、様々な視点から現代日本語の表記にアプローチする研究を集めている。扱われるテーマは句読点、括弧、LINEのスタンプ、仮名づかい、改行など多岐にわたり、データに基づいた分析によって日本語の表記の現状と表記研究の可能性を追究している。

本書の構成は以下のとおり。「まえがき」に続き、「第1章 日本語力が向上すると段落はどう変わるか（石黒圭）」「第2章 接続詞の表記の実態と選択要因（井伊菜穂子）」「第3章 「ニアタッテ」は仮名で書くか、漢字で書くか——複合助詞における動詞の表記に注目して——（本多由美子）」「第4章 日本語教育学分野における研究論文の要旨の表記の実態——文字種比率と符号・記号の用いられ方——（三谷彩華）」「第5章 小中学生のかぎ括弧の使い方（砂川有里子）」「第6章 子どもはいかに言葉を選ぶか？（宮城信）」「第7章 日本語教科書の形容詞並列文に読点は必要なのか（市江愛）」「第8章 大学生はローマ字入力の入力方式をどのように選んでいるのか（田中啓行）」「第9章 読みやすさに関わるテキストの非言語的要素の調査（横野光）」「第10章 「やさしい日本語」ガイドラインにおける表記方法の実態と課題（岩崎拓也）」「第11章 LINEにおいてスタンプはどのように用いられてきたか？——若年層における2010年代の使用実態をめぐって——（落合哉人）」「第12章 表記ゆれの実態と国語辞典の表記情報との比較（柏野和佳子）」「第13章 二重表記の歌詞における出現傾向とその時代的変化（胡佳芮）」。末尾に索引を付す。（川島

拓馬)

(2025年5月8日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 260頁 定価6,820円 ISBN 978-4-8234-1281-3)

半沢幹一著『古典文学にとって会話文とは何か』

本書は、古典文学の文章において、会話文がどのように地の文と関わり、どのように差別化されているのかを歴史的に明らかにしようとした書である。会話文の分量や、引用の形、構成、やり取りの程度、意図や様態といった観点から考察が行われている。

本書は全12章からなる。構成は以下の通り。「まえがき」「序章」「第1章 古事記」「第2章 日本靈異記」「第3章 土左日記」「第4章 竹取物語」「第5章 伊勢物語」「第6章 和泉式部日記」「第7章 堤中納言物語」「第8章 平治物語」「第9章 徒然草」「第10章 世間胸算用」「第11章 おくのほそ道」「第12章 雨月物語」「終章」「付章古今集」。末尾に「あとがき」「小見出し語句分類索引」を付す。(竹村明日香)

(2025年5月8日発行 ひつじ書房刊 A5判縦組み 320頁 定価5,720円 ISBN 978-4-8234-1292-9)

清水康行著『速記と録音と日本語の近代』

本書は、2024年4月に逝去した清水康行氏の研究業績のうち、速記および録音資料による近代日本語研究に関する論考をまとめたものである。

本書は22本の論考からなる。構成は以下の通り。「版下作成の方針」「1 落語と速記と録音と」「2 言語資料として見た速記本『^桂_談牡丹燈籠』における二重性」「3 鶴見大学図書館蔵『^桂_談牡丹燈籠』別製本について——その書誌的紹介ならびに初版本との語法上の相違点——」「4 東京落語資料の問題点若干——十九世紀末~二十世紀初頭の東京口語文法研究のため——」「5 速記は「言語を直写」し得たか——若林琳蔵『速記法要訣』に見る速記符号の表語性——」「6 円朝速記本と言文一致」「7 文章語の性格」「8 録音資料の歴史」「9 快楽亭ブラックと平円盤初吹込」「10 今世紀初頭東京語資料としての落語最初のレコード」「11 快楽亭ブラックの日本語の発音」「12 二十世紀初頭の東京語子音の音価・音訛——落語レコードを資料として——」「13 二十世紀初頭の東京語母音の音価・音訛——落語レコードを資料として——」「14 二十世紀早期の演説レコード資料群に聴く合拗音の発音」「15 東京語の録音資料——落語・演説レコードを中心として——」「16 最も早い日本語録音資料群の出現——一九〇〇年パリにおける川上音二郎一座の平円盤録音——」「17 一九〇三年二月録音の東京落語平円盤資料群について」「18 一九〇〇年~一九〇一年にパリで録音された日本語音声資料群」「19 欧米の録音アーカイブズ——初期日本語録音資料所蔵機関を中心に——」「20 一九〇〇年パリ日本語録音資料の概要と吹込者の特定」「21 一九〇〇年パリ日本語録音資料の発音・語法上の特徴」「22 一九二三年にパリで録音された上田万年による『天草版平家物語』の解説と朗読——フランス国立図書館所蔵一九二〇年代日本語録音資料群——」。末尾に「解説 清水康行先生の学問(鈴木広光)」「校訂付記」「初出一覧」を付す。本書の編

集には鈴木広光・小柳智一・山東功各氏が携わり、岡部嘉幸・櫻井豪人・常盤智子・服部紀子各氏が編集協力を行った。(竹村明日香)

(2025年5月10日発行 くろしお出版刊 A5判縦組み 400頁 定価9,680円 ISBN 978-4-8011-1014-4)

田島優著『「あて字」の日本語史』

本書は、著者の旧著『「あて字」の日本語史』(風媒社、2017年刊)を文庫本化したものである。上代から現代までのあて字を、日本語の書記スタイルの歴史的変遷と絡めて論じている。

本書の構成は、[導入編]と[歴史編]に大別される。「はじめに」に続く[導入編]には、「1 ようこそあて字の世界へ」「2 メディアのあて字を眺めてみれば」「3 国語辞書ではあて字はどのように扱われているか」を収め、名前や歌詞、漫画などの身近なあて字を取り上げる。[歴史編]では、書記スタイルの変遷や、印刷、外国文化との接觸などと関連づけながら、上代から現代までのあて字の発生経緯について説明する。詳細は以下の通り。「1 異国のことばを書き写す(古代のあて字①)」「2 日本語を漢字で書く(古代のあて字②)」「3 文字を使いこなす(古代のあて字③)」「4 和語と漢語の結びつき(古代のあて字④)」「5 自立語を漢字で書く(古代のあて字⑤)」「6 あて字の認識(中世のあて字①)」「7 真名で書く(中世のあて字②)」「8 製版印刷と振り仮名(近世のあて字①)」「9 漢語の口語化と漢字執着(近世のあて字②)」「10 西洋との出会いと白話小説(近世のあて字③)」「11 漢字平仮名交じり文への統一(近代のあて字)」「12 戦後の国語政策とあて字(現代のあて字)」。コラムとして「①時計」「②不憫(不愍)」「③普段」「④本当」「⑤冗談」「⑥堪能」「⑦容赦」「⑧真逆」の語彙も収める。末尾に「参考文献・引用文献」「おわりに」「文庫版 おわりに」を付す。(竹村明日香)

(2025年5月15日発行 法藏館刊 A6判縦組み 328頁 定価1,430円 ISBN 978-4-8318-2696-1)

島田泰子著『日本語における一字漢語サマ名詞の研究——「式(しき)」と「体(てい)」の用法史——』

本書は、ものごとのありさまや様子を表す一字漢語サマ名詞について論じたものであり、特に「式(しき)」と「体(てい)」の2語を取り上げている。こうした名詞は早くから日本語に取り入れられ、熟語の構成要素となったり、機能語となって助動詞化したりと様々に用いられ、日本語表現の中に溶け込んでいる。本書においては、「式」と「体」のそれぞれについて、一字漢語名詞としてのもの、接尾語としてのもの、熟語を形成するものに分けた上で、時代ごとの用法やその変化などが記述されている。更に総論として、サマ名詞熟語の構造やサマ名詞の表現性の観点から、その特質を追究している。

本書は全3部10編からなる。「序論」に続き、「第一部 「式(しき)」」には「第一編 一字漢語「式」とその形式化」「第二編 近世における接尾語「—しき」「第三編 「式」

による熟語形成」「第四編 第一部のまとめと補遺」を収める。「第二部 「体(てい)」」には「第一編 一字漢語(由来の)名詞「体」」「第二編 接尾語「—てい」の意味用法」「第三編 「体」による熟語形成」「第四編 第二部のまとめと補遺」を収める。「第三部 一字漢語サマ名詞・総論」には「第一編 「サマ名詞熟語」論」「第二編 「サマ名詞表現」論」を収める。末尾に「付論」「あとがき——令和六年のサマ名詞論——」「索引(事項・語句)」を付す。(川島拓馬)

(2025年5月20日発行 和泉書院刊 A5判縦組み 432頁 定価11,000円 ISBN 978-4-7576-1123-8)

米川明彦編著『集団語大辞典』

本書は、著者の旧版『集団語辞典』(2000年、東京堂出版)を改訂し、189集団から見出し語数を二倍(約13,200語)、用例数を三倍にして、所属集団・意味・用例を掲載した辞典である。用例は江戸時代から近年のものまで集められている。集団語には隠語だけでなく非隠語もあるため、学生集団の語(若者ことばを含む)や趣味娯楽集団の語(たとえばオタク用語)も掲載されている。

構成は以下の通り。「序文」「凡例」「集団(分野)一覧」に続き、「集団語大辞典」「集団語概説」を収める。そして本辞典に頻出する100の集団の収録語をまとめた「集団別分類」と、類義語・同義語をひとまとめにした「意味別分類」を掲げる。末尾には「主要用例引用文献一覧」「参考文献」を付す。(竹村明日香)

(2025年6月10日発行 東京堂出版刊 A5判縦組み 1824頁 定価30,800円 ISBN 978-4-490-10955-9)

金水敏編『役割語とキャラクター——ポピュラーカルチャーをより深く理解するために——』

本書は、研究社のWEBマガジンLinguaに連載された「〈役割語〉トークライブ!」の記事を母体にした論文集である。ジブリアニメ、ライトノベル、村上春樹作品、『シン・ゴジラ』等の多彩な作品を分析し、キャラクター論だけでなく文字・表記論への新たな提案も盛り込んでいる。

本書は全8章からなる。「第1章 役割語からキャラクターへ(金水敏)」「第2章 キャラクターの「属性表現」——ツンデレ・ボクっ子・無口系キャラ——(西田隆政)」「第3章 これも役割語①——〈西洋人語〉「おお、ピエール」——(依田恵美)」「第4章 これも役割語②——キャラクター描写と社会記号資源としての日本語の文字——(松田結貴)」「第5章 映画『シン・ゴジラ』の役割語(依田恵美)」「第6章 役割語でジブリアニメを読み解く——『もののけ姫』を中心に——(金水敏)」「第7章 役割語で小説を読み解く——ケーススタディ:『海辺のカ夫カ』——(金水敏)」「第8章 まとめ、および《人格》について(金水敏)」。末尾に「あとがき」「索引」「編著者・執筆者紹介」を付す。(竹村明日香)

(2025年6月30日発行 研究社刊 四六判縦組み 296頁 定価2,860円 ISBN 978-4-327-38493-7)